

令和3年度八代市医師会事業報告

令和3年度、八代市における新型コロナウイルス感染者確認状況（令和3年4月1日～令和4年3月31日）は、4,807人の感染者が確認されている。男女別感染者数は、男性2,300人、女性2,507人であり、年代別感染者数は、10歳未満692人・10歳代792人・20歳代620人・30歳代654人・40歳代585人・50歳代443人・60歳代378人・70歳代255人・80歳代250人・90歳代134人・100歳以上4人という分布になり、28施設でのクラスターが発生している。

八代市医師会の新型コロナウイルス感染症感染対策の取り組みについては、八代地域での感染拡大時に備え、熊本県新型コロナウイルス感染症緊急包括支援事業の帰国者・接触者外来等設備整備事業を活用したPCR検査の検体採取が可能な八代市医師会地域外来・検査センター（ドライブスルー方式）と感染症検査機関等施設整備事業を活用した検体検査が可能なLAMP法遺伝子検査システムの関連整備、並びに八代市医師会健診検査センターで既存の酸素免疫化学発光法（ルミパルスG1200）の検査システムを抗原定量検査が可能なシステム変更を令和2年度後半までに完了し稼働実施体制を整備した。これにより、かかりつけ医が新型コロナウイルス感染症の検査を必要と認めた場合に地域外来・検査センター（ドライブスルー方式）でのPCR検査（鼻咽頭拭い液・唾液）、並びに健診検査センターにおける抗原定量検査（鼻咽頭拭い液・唾液）の機能がワンストップで対応できる体制を整備し、令和3年度における検体検査数が約7,500検体に及んでいる。

高齢者施設等でのクラスター発生時の支援として、高齢者施設COVID-19クラスター防止チーム（八代市・八代郡医師会の8名の医師で構成）を編成し、八代保健所からの要請での電話診療（ラゲブリオや解熱剤等の処方含む）、訪問診療（入所者の受診・入院調整、検体採取、スタッフへの助言など）を行い、自宅療養者の支援としては、八代保健所からの要請での電話診療を行い、ラゲブリオ、発熱や咽頭痛・頭痛、咳嗽、下痢症状、吐き気など、必要に応じての処方も行い、常に新型コロナウイルス感染症の感染状況を八代保健所と情報共有している。

次に八代看護学校の学則変更については、近年の准看護師課程入学者の減少に伴い、今後の運営に関するアンケート調査など、会員各位のご意見等を基に、八代看護学校運営検討委員会で検討を重ね、理事会や臨時総会の承認を経て、当面の間、看護師2年課程（定員120人 40人×1クラス×3学年）は現状維持。准看護師課程（定員80人 40人×1クラス×2学年）を存続することとなった。これにより、准看護師課程では令和4年度より、看護師2年課程では令和5年度より新しいカリキュラムに沿った学則変更を熊本県へ行った。

令和3年度、八代市医師会の大きな流れは以上であるが、以下は各事業部門の主たる事業について報告する。

《医師会事務局》

1) 公衆衛生向上及び社会福祉増進を図る事業（地域保健・学校保健・母子保健・産業保健・福祉医療） 2) 医道の高揚・医学医術の発展普及を図る事業 3) 会員相互扶助事業の業務がある。学校保健では、小中学校における学校医手当て等の予算折衝や学校医の配置など、関係機関と緊密な連携を取りながら最新の情報収集、提供と迅速な対応に努めた。

また、熊本県の新型コロナウイルス感染症の感染対策の一環として、八代市医師会受診案内センター業務を受託し、発熱等の有症状者に対して、かかりつけ医の紹介や検査受診可能な診療・検査医療機関の紹介などの相談業務に従事した。

《看護学校》

地域において、医療・保健・福祉・介護のそれぞれの分野で専門性を活かした看護師及び准看護師養成の重要性を踏まえ、看護師国家試験並びに准看護師検定試験では100%の合格率で常に県内トップクラスの位置を堅持し、何れの課程における卒業生の県内就職定着率もAランク評価の調整率を得ている。

また、看護師2年課程・准看護師課程ともに受験者数が減少傾向にあり、担当理事を中心に種々の検討が重ねられ、新型コロナウイルス感染症の感染対策を配慮したWebによるオープンスクールの開催にも取り組んだ。

《健診検査センター》

医師会共同利用施設として、地域・職域での各種健診やがん検診などの多岐にわたる業務を担い、疾病の予防・早期発見に努め、早期の受診勧奨を行い、また、八代地域唯一のラボとして質の高い精度管理を基本に緊急及び24時間対応の検体検査体制を整備し、健診業務並びに検査業務それぞれであらゆるニーズに迅速かつ的確に対応した。

特に、新型コロナウイルス感染症対策では、PCR検査・抗原定量検査の検体検査における充実した検査体制を確立した。

《訪問看護ステーション》

地域包括ケアシステムの構築に向けた訪問看護ステーションの重要性と医療・保健・福祉・介護など、多職種のリーダー的存在としての体制整備が着実に進み、医療の立場からは特に医療依存度の高いケースに重点的に取り組んだ。

また、居宅介護支援事業所では、必要スタッフの配置が完了し、特定事業所加算取得も可能となり、関係機関との更なる連携を図りながら業務に取り組んだ。

《医師会立病院》

医療療養病床（入院基本料I 100床）での病床稼働では、医療区分2または3の入院患者を3ヵ月平均80%以上という厳しい基準を維持するために、医師・看護師・地域医療連携室を中心にスタッフの連携によるプロフェッショナルリティーに感謝しなければならない。

また、地域在宅医療サポートセンター事業を活用した開業医からの軽症者等の入院受け入れ体制や在宅医療の推進についても体制整備が着実に進んでいる。

《夜間急患センター》

八代市の委託を受け、本会会員の尽力で八代市民の夜間急患センター利用が着実に定着している。特に小児医療については、小児科医会並びに内科協力医師による小児医療の充実が八代市医師会活動の大きな柱の1つである。ただ、新型コロナウイルス感染症の影響による受診控えが依然としてある。夜間急患センターとしても感染予防対策を十分講じながら更なる診療体制を図らなければならない。